

## 外来語における原語音韻(イギリス英語中心)の日本語化

王 度\*

### The Japanization of Original Phoneme of Borrowed British English Vocabulary

Wang Du

Many Chinese learners of Japanese have studied English as a foreign language in junior and senior high school. For these learners, there are many cases in which the meaning of borrowed Japanese words are known or assumed through the knowledge of the sound of the original from the word. Therefore it is a great help in the acquisition of Japanese language to grasp the method of Japanization of English.

Japanization of English is produced through three patterns, from the relation of single sounds, use of syllables and by duplicating the English accent.

In this paper, the author shows examples of English phoneme and its relation with Japanese 'kana' through examples of borrowed words.

はじめに

明治以降、英語を中心として、ドイツ語、フランス語、ロシア語などのヨーロッパの諸外国語は日本語にどんどん入ってきて、その中で英語から借り入れたものが、現代外来語の8割以上を占め、いろんな分野で幅広く使われている。それほどの外国語は外来語に移行するとき、日本語の特有な音韻体系によって、当然音韻上様々な変化を起こすわけである。その変化を考察してみると、実に外来語の使用が社会的に受け入れられるために、原語音韻を日本語化してしまう結果であると考えられる。具体的に言えば、その日本語化は、次の三つのレベルから見ることができる。単音レベルには、日本語と調音上の類似性の持つもので置き換える場合もあれば、英語の独特のものをそのまま用いて外来音になる場合もある。音節レベルにおいて、英語の語尾子音や、子音連続中の母音を伴わない子音は、多くの場合、日本語の母音 [u/i/o] を添えて音節化されるが、母音を添えない直接音節化する場合も、促音を挿入する場合もある。アクセントのレベルでは、原語音韻の省略や促音の挿入などによって、英語の強弱アクセントと日本語の高低アクセントとのずれを調和するのがよくある。

ところが、日本語化の過程において、終局的に次の二つの傾向が見られる。その一つは、原語の音韻に歩み寄って、できるだけそれを忠実に伝達しようとする、いわゆる原音主義の傾向である。もう一つは、日本語の音韻体系を重視し、原語音をそれに合わせて発音する、いわゆる和音主義の傾向である。それらの傾向は、外来語のほとんどに貫かれているので、その結果として、原語音韻の日本語化が複雑になってくる。

一方、中学校、高校の期間に英語を第一外国語とする中国の日本語学習者にとっては、外来語からその原語の音形を推測できれば、その外来語の意味も知ようになる場合が多い。そのため、英語音韻の日本語化、及び仮名との一般対応関係をしっかりと把握しておけば、日本語の習得過程に役立つことである。

次は、外来語の実例を通して英語の音韻と仮名とのさまざまな対応関係を一つ一つ掲げる

\* 教養部

ことにする。

# 一、単音レベルでの日本語化

イギリス英語に即して言えば、母音には 23 個、子音には 28 個があつて、次のようである。

単母音 [i:] [i] [e] [æ] [a:] [ɔ] [ɔ:] [u] [u:] [ə] [ə:] [ʌ]

二重母音 [ei] [ai] [ɔi] [au] [ou] [iə] [εə] [uə] [ɔə]

三重母音 [aiə] [auə]

子音 [k/g/ŋ/s/f/z/ʒ/t/d/n/h/p/b/m/j/r/w/l/f/ð/θ/v/ʃ/ʒ/tr/ʈ/dr/ʡ]

それを日本語の音韻体系と比べると、その数は多いことが分かる。中では、日本語と調音上の類似性を持つものもあるし、英語の独特なものもある。では、実際に原語音韻はどういうふうに仮名と対応しているかを、その語例を調べてみることにしよう。

## 1.1 類似音による音韻対応の例

まずは、母音の対応例である。

[a:]→アー：アート(art[a:t]) [i:]→イー：イーブン(even[i:vən])

[i]→イ：イディオム(idiom[idiəm]) [u]→ウ：グッド(good[gud])

[u:]→ウー：クール(cool[ku:l]) [e]→エ：ベッド(bed[bed])

[ɔ]→オ：オフィス(office[ɔfis]) [ɔ:]→オー：オーダー(order[ɔ:də])

次に、子音の対応例である。

[k]→カ行子音：カーブ(curve)、キンク(kink)、クッション(cushion)、ケミスト(chemist)、コピー(copy)。

[g]→ガ行子音：ガラナ(guarana)、ギア(gear)、グッズ(goods)、ゲーム(game)、ゴール(goal)。

[s]→サ行子音：サイズ(size)、シスター(sister)、スープ(soup)、セメント(cement)、ソート(sort)。

[ʃ]→シの子音：シャープ(sharp)、シース(sheath)、ショット(shoot)、シェード(shade)、ショット(shot)。

[z]→ザ行子音：ザイール(zaire)、ジグザグ(zigzag)、ズームレンズ(zoomlens)、ゼロ(zero)、ゾロアスタ教(zoroaster)。

[ʒ/ʒ]→ジの子音：ジャム(jam)、ジグ(jig)、ジュース(juice)、ジェオロジスト(georgist)、ジョーカー(joker)、ルーージュ(rouge)。

[ŋ]→ング：スケーティング(skating)、ソング(song)。

[t]→タ行子音：タイトル(title)、ティー(tea)、ツア(tour)、テーブル(table)、トピック(topic)。

[ʧ]→チの子音：チャート(chart)、チーフ(chief)、チューインガム(chewinggum)、チェック(check)、チョコレート(chocolate)。

[ʈ]→ツの子音：ガッツ(guts)。

[d]→ダ行子音：ダム(dam)、レディ(lady)、ヅランテ(durante)、データ(data)、ドア(door)。

[ʡ]→ズの子音：グッズ(goods)。

[n]→ナ行子音：ナイン(nine)、ニコチン(nicotine)、ヌードル(noodle)、ネーム(name)、ノック(knock)。

[h]→ハ行子音：ハーフ(half)、ヒール(heel)、フレイ(hurray)、ヘアピン(hairpin)、ホテル(hotel)。

[p]→パ行子音：パイプ(pipe)、ピーチ(peach)、プール(pool)、ペア(pair)、ポスト(post)。

[b]→バ行子音：バイク(bike)、ビューティー(beauty)、ブック(book)、ベース(base)、ボクサー(boxer)。

[m]→マ行子音：マスター(master)、ミート(meat)、ムード(mood)、メッセージ(message)、モーション(motion)。

[r]→ラ行子音：ラッシュアワー(rush-hour)、リサーチ(research)、ルール(rule)、レーダー(radar)、ロータリー(rotary)。

[j]→ヤ行子音：ヤード(yard)、ユーザー(user)、ヨット(yacht)。

[w]→ワ行子音：ワード(word)。

## 1.2 音韻欠如の補足

全体的に見れば、日本語の音韻は英語のそれより単純なので、原語音を外来語に伝写するとき、どうしても空白が現れ、それを類似する日本音で埋める必要が生じる。母音では、英語の23個の母音を日本語の五つの母音で賄うには、[æ/ʌ/ə]の「ア」への合併や、[ei/ou/ju]から「エー、オー、ユー」への長音化、二重母音[ai/ɔi/au/ou/iə/εə/ɔə/uə/aɪə/auə]を二分して「アイ、オイ、アウ、イヤ、エア、オア、ウア、アイヤ、アワ」にするような単母音化などの工夫が必要になる。具体的にその一般的な対応は次のようである。

lamp [læmp]→ <u>ランプ</u>	butter [bʌtə]→ <u>バター</u>	propeller [propelə]→ <u>プロペラ</u>
permanent [pəːmənənt]→ <u>パーマネント</u>	tape [teip]→ <u>テープ</u>	boat [bəʊt]→ <u>ボート</u>
tube [tjuːb]→ <u>チューブ</u>	guide [gaɪd]→ <u>ガイド</u>	oil [ɔɪl]→ <u>オイル</u>
count [kaʊnt]→ <u>カウント</u>	hearing [hiəriŋ]→ <u>ヒヤリング</u>	air [εə]→ <u>エア</u>
door [dɔə]→ <u>ドア</u>	poor [puə]→ <u>プア</u>	diamond [daɪəmənd]→ <u>ダイヤモンド</u>
power [paʊə]→ <u>パワー</u>		

子音では、英語にしかない独特のものとして、[f/v/l/θ/ð/kw]などがあり、外来語においては、次の仮名との対応関係をなしている。

[f]→：セロハン(cellophane)、プラッホーム(platform)、ワッフル(waffle)。

[v]→：バイオリン(violin)、ビタミン(vitamin)、ベランダ(veranda)、ボリューム(volume)。

[l]→：ライター(lighter)、リップ(lip)、ルックス(looks)、レター(letter)、ロビー(lobby)。

[θ]→：サンキュー(thank you)、シック(thick)、スリー(three)、セオリー(theory)、マラソン(marathon)。

[ð]→：レザー(leather)、リズム(rhythm)。

[kw]→：レモンスカッシュ(lemon squash)、クイズ(quiz)、スクエアダンス(square dance)、イクール(equal)。

つまり、[f]は「ハ行子音」に、[v]は「バ行子音」に、[l]は「ラ行子音」に、[θ]は「サ行子音」に、[ð]は「ザ・ズの子音」に、[kw]は「カ・クイ・クエ・コー」にそれぞれ対応して、英語特有のものを類似した日本語の在来音で代用するようになる。

## 1.3 対応関係の不安定さ

以上で挙げたように、外来語の発音は原語音に類似する日本語音であると言ってもいいが、詳しく見ると、その類似性はさまざまな程度の差があるようで、中では部分的に原語音、すなわち外来音をそのまま用いたものがある。外来音というと、実際に外国語の子音に日本語の母音をつけて出来た新しい音節である。

英語から入ってきた主な外来音には、200 スィースィー(200CC)、シェークスピア(Shakespeare)、ジェット(jet)、ティーム(teem)、トウーレート(too late)、チェーン(chain)、テューダー(Tudor)、ディーケー(dining kitchen)、ドウーワップ(doo-wop)、デュアル(dual)、

イースト(yeast)、イエルサレム(Jerusalem)、ウィザード(wizard)、ウェディング(wedding)、ウォーミングアップ(warming up)、ウール(wool)、クアルテット(イ quartetto)、クインテット(イ quintetto)、クエスチョン(question)、クオート(quote)、ヴァレンティヌス(Valentinus)、ヴィクトリア女王(Victoria)、ヴェール(veil)、ヴォキャブラリー(vocabulary)、ファース(farce)、フィット(fit)、フェスティバル(festival)、フォーク(fork)などのようなものがある。

しかし、外来音をどの程度にまで用いられるかは、実際に人によって、また語によって揺れが生じる。例えば、200 シーシー(200CC[si:si:])、セパード(shepherd[ʃepəd])、ゼリー(jelly[ʤeli])、パテ(putty[pati])、スチーム(steam[sti:m])、チッキ(check[ʃek])、チューブ(tube[tju:b])、クレジット(credit[krædit])、ブランデ(brandy[brændi])、ズック(オ doek)、ジュース(deuce[dju:s])、イエロ(yellow[jelou])、ウインド(window[windou])、ウエルカム(welcome[welkom])、ウオッチ(watch[wɔ:ʃ])などのようである。そうした処理法は、その対応関係の不安定性を助長してくる。

外国語では、特に母音の聴覚印象が、その音韻環境によって変わることがある。同じ[i]の母音でも、スイート(sweet[swi:t])という語では[w]が省略され、プリン(pudding[pudɪŋ])という語では[d]が「ラ行子音」に変わり、スーツ(suit[sju:t])という語には[ju:]も「ウー」になる。それに、同じ[æ]の音でも、[p]に続くとき、たとえパック(pack)のように「ア」と聞かれ、[k]に続くとき、たとえキャット(cat)のように拗音に聞こえる。また、無強勢の母音は、強勢のあるそれとは別の音になる。例えば、report[ri'pɔ:t]の[i]は、強勢がなく、「イ」よりむしろ「エ」に近く、「レポート」になる。そのため、外来語と原語音との対応関係では、更に次のような伝写音が加わって対応関係を複雑にしている。

単母音の[i][æ][ʌ][ə]は、それぞれ「エー・エ・イー」、「エ・ヤ」、「オ・ウ」、「アー・オ」で置き換えることもあるし、長母音の[u:] [ɔ:]は、別々に「ユー」、「オア」で代用することもある。二重母音では、その[ei] [au] [ou] [iə]はそれぞれ「エ・エイ」、「ア・オー」、「オ」、「イア」で伝写することもある。具体的には、キャンデー(candy[kændi])、パテ(putty[pati])、セロリニ( celery[sələri])、ケビン(cabin[kæbin])、ギャラリー(gallery[gæləri])、トンネル(tunnel[tʌnl])、ウルトラ(ultra[ʌltrə])、ペーパー(paper[peɪpə])、オピニオン(opinion[əpinjən])、ブリュー(blue[blu:])、フロア(floor[flo:])、レディ(lady[leɪdi])、エイト(eight[eɪt])、バンド(bound[baʊnd])、ポンド(pound[paʊnd])、ポスト(post[pəʊst])、クリア(clear[kliə])、バイアス(bias[baɪəs])、タオル(towel[tauəl])などのようなものがある。

## 二、音節レベルでの日本語化

### 2.1 英語における音連結上の特徴

特定の言語の音韻上の特徴は、単音で作る音韻組織の全体的分布に現れるばかりでなく、単音の連結の法則にも現れる。もちろん、英語と日本語とで、両方とも母音と母音の間に子音を挟むことでは、一致している。

しかし、日本語では母音と母音との間に子音を一つしか挟まない。換言すれば、日本語では一つの母音の前には一つの子音しか付かない。その子音と母音の連結があたかも一つの単位として意識され、「音節」と名付けられる。この音節の構造は「子音C + 母音V」と、「開音節」になっている。もちろん、「お祝い」のように母音連続の場合もあるが、それは極めて少ない。子音の付かない母音ばかりでも一つの音節が出るので、この語には四つの音節があることに

なる。

日本語とは裏腹に、英語では母音と母音との間に、子音が連続して 2、3 個も挟まるのがごく普通で、日本語とは歴然とした差異が見られる。例えば、英語の extra[ekstrə]で、始めの[e]と終わりの[a]の間に子音が四つも入っている。そのように、母音を伴わない子音連続と、語尾の子音による閉音節は、英語にはざらにあるが、日本語には原則的に存在しない。そして、日本語の子音は、母音に比べて音量が乏しいため、母音が後続するとき、どうしても従属的になり、単音連結では母音に対して一種の導入的渡り音とでも言うべき存在である。これに反して、英語の子音は独立性がより強く、母音なみの響きを持つ。そのため、単音それぞれが語音構成の基礎となっていて、日本語の語構成の基礎が音節となっているのとは質的な違いが認められる。

## 2.2 単子音の音節化

音節の[C + V]構造は、日本語の音韻構成の基礎となっていて、英語を外来語として取り入れるとき、原語の単音を音節化するのが原則となっている。特に、原語における語尾の子音や、子音連続中の母音を伴わない子音は、多くの場合、母音を添えて一音節とする。例えば、strike[straik]は、外来語に移行するとき、子音[s/t/k]の後ろに、それぞれ[m/o/i]という母音を添えてストライキ[sutoraiki]にする。部分的にはもちろん、母音を添えないで一音節になるものもあって、インク(ink[ink])がその例である。また、音節化する過程で促音が挿入される場合もある。例えば、stick[stik]は、促音を入れて「スティック」とする。音節化する過程を、母音を添える場合と添えない場合とに分けて、次のように整理してみる。

### 1) 母音を添える場合

ア、子音連続中の母音を伴わない子音の音節化：extra→エキストラ。

イ、語尾子音の音節化：salad→サラダ。

### 2) 母音を添えない場合

ア、語中での鼻子音の音節化（撥音化）：tempo→テンポ。

イ、語尾子音 n：clean→クリーン。

### 3) 促音の添加

原語中の単母音の後ろに、[p/d/t/d/k/g/h/f/θ/s/ʃ]などの子音が来る場合：stop→ストップ。

## 2.3 音節化の方法

原語中の語尾子音は、後ろに来る音の影響を受けることがないから、子音連続中の前部にある子音よりも、その本来の音質上の特性を保ちやすい。そのため、外来語に移行するとき、後ろに母音を伴わない語尾子音をいかに音節化するかを調べることは、子音の音節化を究明する上で、典型的なケースになると考えられる。

英語において、語尾子音は、主に[p/b/t/d/k/g/f/m/n/l/ŋ/θ/ð/ʒ/ʃ/v/z]などがあるが、それらがどういうふうに音節化されるのかというと、top→トップ、club→クラブ、ground→グラウンド、apart→アパート、egg→エッグ、check→チェック、knife→ナイフ、song→ソング、storm→ストーム、screen→スクリーン、bath→バス、ball→ボール、five→ファイブ、glass→グラス、jazz→ジャズ、brush→ブラシ、page→ページ、touch→タッチ、rouge→ルーージュ、pants→パンツ、woods→ウーズなどの例から見える。

以上の例を整理すると、原語語尾の音節化には、次の五種の様式があることが分かる。

①「子音+m」→[p/b/k/g/f/m/l/ŋ/θ/ð/ʒ/ʃ/v/z]などの子音の音節化。

②「子音+i」→[f/θ/k/ʃ]などの子音の音節化。

③「子音+i&m」→子音[k/ʃ]の音節化。

④「子音+o」→[t/d]子音の音節化。

⑤「直接音節化」→[n]しかない。

#### 2.4 [u/i/o]を添える音節化の理由

日本語の短母音ウ葉その響きがほかの母音より弱いと同時に、音色も鈍いという音調特徴があり、それに、後ろに来る音に同化しやすく、呼吸圧の低いこともあって、わずかに短く発音する傾向がある。そのため、それを用いて英語の語尾子音、また子音連続の前部にある子音を音節化するとき、もとの調音特徴がある程度保たれることになる。短母音イは、その調音点と調音法からしてイ段子音と深く結びついているので、原語語尾の[ʃ/ʧ/ʤ]が「シ・ジ・チ」になりやすいのは当然である。殊に、日本語では、[w/i]はほかの母音より無声化の生じる頻度が高く、さらに完全脱落して促音になる場合も少なくない。母音の無声化というと、音韻的に考えれば、母音があるはずのところに声帯の振動が起こらない現象である。その発生の典型的な環境は、アクセントの核の置かれていない音節の狭母音[u/i]が、その前後を清子音に挟まれた場合と、それが文末に置かれた場合である。たとえば、「秋から……」「秋。」などの音の流れでは「キ」が無声化しやすい。

無声母音という用語が出てきたが、それは清子音の発音のときとほぼ同じ喉頭の状態で発される母音のことである。「シ・チ・ヒ」の清子音[ʃ/ʧ/ç]、また「ス・ツ・フ」の清子音[s/ʧ/ɸ]などから、それぞれ「イ・ウ」に極めて近い音質を持った無声音を得ることができる。それがすなわち無声母音[i/w]である。母音「イ・ウ」の無声化した結果、漢字音の入声字[-k/-t]を伝写するときに、音節単位で[i][w]をつけても、実際の語音発音ではその母音が完全に脱落して、促音になるのが普通である。たとえば、「学校」の字読み「ガクコウ」が実際の語読みでは「ガッコウ」になったり、「発達」の字読み「ハツタツ」が実際の語読みでは「ハッタツ」になったりする具合である。要するに、日本語の「イ」と「ウ」は狭母音といているように、音声学的にはかなり子音に近い性質を持ったものである。したがって、[i/w]の無声化、あるいは促音化に見えるような脱落によって、日本語のイ段とウ段子音は、英語の閉音節の環境とよく似たものになっている。結局のところ、日本外来語において狭母音[i/w]で原語の子音連続中の前部子音や語尾子音の音響を表すのは、音声学的にも正しい選択となる。

原語語尾の子音[k/ʃ]の音節化には[w]を添える場合と、[i]を添える場合とがある。strike→ストライク・ストライキ、brush→ブラシ・ブラッシュなどはその例で、理由として音声学的には二つの原因が挙げられ、逆行同化と順行同化、および母音調和と言われている。

[k+i]のような音節は、ほとんど大正期以前の外来語に現れ、主にポルトガル語とオランダ語に集中している。例えば、christ(ポ)キリストや、klink(オ)キリンキなどのように、[k]に後続する子音[r/l]は、[i]を添えて音節化したため、[k]自身もその影響を受けて「キ」と音節化する。この現象が音声学で言う逆行同化である。後続する音節に[w/a/o/e]が続けば、その前の[k]なども、それぞれ同じ母音を添えて音節化する。cruz(ポ)→クルズ、kraan(オ)→カラ<sup>ン</sup>、drop(オ)→ドロップなどはその例である。これと反対に、前の音節の子音に[i]あるいは[o/a]などが添えられていて、その後続の母音を伴わない子音が、同じ母音を持つ音節になることがある。例えば、melk(オ)→メリキ、vork(オ)→ホ<sup>コ</sup>、haak(オ)→ハッ<sup>カ</sup>のような例をあげることができるが、この現象が音声学でいう順行同化である。

初期の日本外来語は、このように音声学の一般論に沿って、多様な形で音節化されたが、それも昭和期以降になると、[k+w]にかなり落ち着いている。永井荷風の『あめりか物語』でのネキタイはネクタイに、島崎藤村の『桜の実の熟する時』でのボキシングはボクシングに、それぞれ移り変わっている。一方、元の音節[-i]をそのまま用いつつ、別に[-w]という音節を作って、意味的に両立する形で用いられるものもある。例えば、ステッキとスティッ

ク、チッキとチェックは、それぞれ同源でありながら語形が2分し、それぞれ「散歩などに使う杖」と「アイスホッケ用の棒」、「合い札」と「小切手」のような意味分担に使われている。

アルタイ諸語にある母音は、一般に調音点から前舌母音と奥舌母音、顎の開き方から狭母音と広母音、唇の丸め方から円唇母音と非円唇母音といった相対立する二系列に分かれ、同一語中では互いに異系列の母音は共存しないという法則がある。すなわち、一語で第一音節がある系列の母音から始まると、第二音節以下の母音は、第一音節と同じ系列内の母音しか来ない。これが「母音調和」の法則である。日本語がアルタイ諸語の一族かどうかという議論が戦わされるときに、よく挙げる証拠に日本語にも母音調和の法則らしいものがあるのではないかという説がある。この説に従えば、外国語音の伝写にもその法則が働いていないかという話がある。例えば、エ段長音は自然に発音するときには[e:]、まじめに発音すれば[ei]と二重母音となる。[i]は弱められた[i]であることからすれば、[e]と[i]が同系列のものだからこそ、同一同然の長音になりうるわけである。母音調和によって、「エキストラ」の場合においても、後続する子音[k]には[i]が添えられて、前の音節と同系列の一つの音節になったのではないかと考えられる。

原語の子音連続の前部や語尾にある[t/d]は、普通[o]を添えて「ト・ド」に音節化される。これは日本語の音節体系に[t+u][d+u]という音節がないからである。母音[o]は、調音点がほかの母音より[u]に幾分近い音なので、やむを得ず[o]で代用したものと考えられる。一方、こういう音節化の様式が落ち着く前には、[t]を「タ」や「ツ」に、[d]を「ダ」「ズ」に音節化したものもあり、今も慣用形として残っている。例えば、trap→タラップ、tree→ツリー、salad→サラダ、drawers→ズロースなどのようなものである。

## 2.5 鼻子音が母音なしで音節化する理由

原語の子音連続中に母音を伴わないほとんどの鼻音は、外来語では直接撥音「ン」一つで賄われる。例えば、ink→インク、campus→キャンパスなどのように、例外がないこともない。summerは「サンマー／サマー」という両方ともあるが、後者は鼻音が脱落した形になる。語中での鼻音とは反対に、語尾子音はその単音によって何種類かに分けられる。具体的には、design→デザイン、storm→ストーム、swing→スイングのようなものがあるが、その伝写法がそれぞれ異なることが分かる。[n]だけが語中と同じ撥音の「ン」になり、[m]は[u]をつけて「ム」となり、[ŋ]だけは二音節の「ング」になる。語中と語尾での判然たる差異は、日本語の撥音/Nは音韻的存在であるからである。撥音にもその元になる音声(原音)の[N]があるが、鼻子音とも鼻母音とも聞こえる曖昧な音なので、後続子音の影響を受けてその音と同類の鼻音に同化しやすい。具体的には次のようになる。

a) タ・ダ・ザ・ナ・ラ行子音、すなわち歯茎音の前では、歯茎鼻音[n]に同化する。先頭[sento:]、先導[sendo:]、先陣[senɕin]、専念[sennen]、戦乱[senran]などはその例である。

b) マ・バ・パ行子音、すなわち両唇音の前では、両唇鼻音[m]に同化する。千万[semman]、線分[sembun]、先輩[sempai]などはその例である。

c) カ・ガ(鼻音)行子音、即ち軟口蓋音の前では、軟口蓋鼻音[ŋ]に同化する。例えば、先回[seŋkai]、戦後[seŋgo]。

d) 母音、半母音の前や語尾およびサ行の前では、以上のような音韻環境が失われて大体原音[N]通りに読まれる。例えば、本位[honi]、翻訳[honyaku]、金[kin]、関心[kanfin]。

以上のように、撥音の原音[N]は、d)以外の音韻環境では、後続する音に同化されて別の単音になる。一方、いずれも鼻音になることでは一致するところがあって、一つの音韻にまとまる。こういう法則は外来語音の伝写にも働くわけで、原語音では鼻子音それぞれが一つの音韻をなしていても、日本外来語ではそれがさらにまとまって一つの音韻「ン」になるので

ある。しかし、語尾での鼻子音はそういう音韻同化の環境がないために、原語音そのままが露出する関係上、一つの撥音「ン」にまとまるわけにはいかない。それぞれ別の処理法を取って音節化するのは、そのためであると考えられる。

上掲の例のように、その中で、原語の[n]だけが、原語語中の子音[n]の場合と同じく、やはり「ン」になる。それは両方とも共鳴域が狭く、音響的に極めて近似しているからであろう。[m]は音節化の一般法則に従って、その後ろに[m]をつけて「ム」と音節化する。それは、「ン」とは音響的に開きがあまりにも大きいからであろう。[ŋ]は、音響的に[n]と近似しているにもかかわらず、「ン」に伝写しないで「ング」と2音節に伝写する。それは音の伝写ではなく、スペリング(ng)の綴り字読みである。英語知識が乏しかった昔の誤りが慣用化して、正式の伝写法となったわけである。

### 三、アクセントのレベルでの日本語化

#### 3.1 強弱アクセントが高低アクセントに

外来語の語音上の特徴としては、必ずアクセントのことに触れなければならない。英語と日本語とでは、アクセントの持つ意味が根本的に違う。英語は強弱アクセントで、リズムで聞く言葉であるが、日本語は高低アクセントで、メロディで聞く言葉であるとも言えそうである。そのため、英語が日本外来語になるとき、強弱アクセントを高低アクセントに切り替えざるを得なくなる。

日本語のアクセントには、アクセント核のあるか否かによって、起伏式と平板式とに分けられているが、原語の強弱アクセントは、そのどれかに処理されることになる。日本語化されるとき、原語の強勢の置かれる位置は、外来語のアクセント核の置かれる位置とは一致する場合もずれる場合もある。さらに、原語のアクセントをより生かすため、原語音韻が脱落したり添加したりすることもある。以下、それぞれの場合を検討してみることにする。

#### 3.2 アクセント核の位置の一致

日本語のアクセントには、次のような法則が働いていることがすでに指摘されている。まずは、音節数の増加につれて、アクセント核が後ろから数えて3拍(モーラ)に置かれることがますます多くなる(便宜上<sup>③</sup>とする)。次は、3拍目が長音(アー、エーなど)や二重母音(アイ、オイなど)の後部、或いは撥音や促音のようなものであれば、一拍前にずれる。この二つの法則は、外来語にも十分具現されて、3モーラ以上の語にはそのアクセントが<sup>③</sup>である場合が多く見られる。楳垣実氏は、東京と京都での3音節外来語30語のアクセントについて、『新明解日本語アクセント辞典』で調べたところ、その結果が次のようになる。

	東京	京都
ガラス <sup>①</sup> のような平板式	11語(35%)	6語(20%)
インク <sup>①</sup> のような <sup>③</sup> 式	18語(60%)	19語(63%)
トマト <sup>②</sup> のような中高型	1語(3%)	5語(17%)

その<sup>③</sup>型のアクセントでは、原語のアクセント核と位置の一致が見られる例が多い。例えば、ライト<sup>①</sup>(li`ght)、スプーン<sup>②</sup>(spo`on)、プロポーズ<sup>③</sup>(propo`se)、プロテクト<sup>③</sup>(prote`ct)などは、日本語のアクセント法則の一番目に従うものである。プレーヤー<sup>②</sup>(pla`yer)、グライダー<sup>②</sup>(gli`der)、ラッキー<sup>①</sup>(lu`cky)などのようなものは、その二番目に沿い、すなわち、<sup>③</sup>にアクセント核が置かれにくいので、1拍前にずれているが、それは日本語自身の事情によるもので、原語のアクセントの強勢の位置と一致するといっている。

以上は、原語のアクセントと日本外来語のアクセントとがそれぞれの法則によって生じた一致であるが、日本語が英語のアクセントを真似たため生じた一致のケースも、アクシデン



ト<sup>①</sup>(a`ccident)、アクセント<sup>①</sup>(a`ccent)、ガイダンス<sup>①</sup>(gu`idance)などのように、少しある。そういうアクセントは、日本語アクセントの法則に従わないで、全く英語のアクセントそのままである。おそらく英語の発音知識を持っている知識人集団と若者の仲間言葉として始まったものであろう。普段の会話で、これらの語のアクセントを<sup>②</sup>型に言っても別に抵抗を感じることがない。

### 3.3 アクセント核の位置の不一致

アクセントの位置のずれに関しては、その典型的なものとして、アイロン<sup>①</sup>(i`ron)のように、アクセント核がなくなる、いわゆる平板化の傾向を挙げることができる。アクセントの平板化の例は、ガラス、カボチャ、キセル、コップ、タバコ、バケツ、ボタンなど、早期に日本語に入った外来語によく見られるが、それだけではなく、最近にもそういう現象が増えつつある。例えば、プロテクト<sup>③</sup>がプロテクト<sup>①</sup>に、ドライバー<sup>②</sup>がドライバー<sup>①</sup>に、メーカー<sup>①</sup>がメーカー<sup>①</sup>に、スポンサー<sup>②</sup>がスポンサー<sup>①</sup>に、起伏型から平板型に切り替えられたものがある。日本語のアクセントは、平板型と起伏型の2種類に分けられ、平板型がその半数以上を占め、日本語アクセントの主流を成している。外国語の起伏型のアクセントが平板型に切り替えられるということは、外国語が長期間の使用を経て、意味的にも発音上にも日本語に帰化したことを物語る。

### 3.4 音韻の脱落と添加

原語のアクセントが、原則として「強・弱・強・弱」のように、強勢と無強勢がかわるがわる出てくる。例えば、illumination[iːluːmiˈneɪʃən]のように、第二強勢が出てきて、「弱・強・弱・強・弱」というリズムになる。一語の中では、「弱・弱」という音節の連続があり得るが、「強・強」という音節連続はあまり起こらない。ところが、日本語の高低アクセントは、「低高高」または「高低低」という音節の連続が起こり得る。そこで、外来語では、原語中の二つの強勢の間にある音節が脱落することが生じる。具体的には次のようである。

ア、二つの強勢の間にある音の省略

G`o ah`ead→ゴーヘー

D`on' t mind→ドンマイ

イ、原語中の子音連続の前部にある鼻子音が無強勢の場合、わりと省略しやすい。

summer→サマー

channel→チャネル

ウ、強勢の前で、発音の弱い音が脱落することがある。

American→メリケン

glcerine→リスリン

エ、強勢の後ろでも音が脱落することがある。

all right→オーライ

handkerchief→ハンカチ

そうした省略は、原語のアクセントを日本語化するとき、ある程度原語のリズミ的な特長も併せて伝達しようとした結果ではないだろうか。

lucky[ˈlʌki]という英語音を聞くと、日本人には「ラキー」でなく「ラッキー」と、促音を挟んだ発音に聞こえ、その通りに表記する。英語では、強勢の置かれる音節がほかの音節より強いと同時にまた高く長い。日本語のアクセントでは、その部分がほかの部分より高いという性質は持っているが、強く長いという性質はもっていない。英語のその性質をまっとうできるのが、促音なのである。これは促音の次のような性質によるものだと考えられる。まず、促音は音声的に無音状態である。次に、時間的に1拍を保つので、その前の拍が長くなる。最後に、「やはり」が「やっぱり」と、促音の挿入によって強調できるように、促音はアクセントの強勢(強い調子)を表現するのに適している。例えば、stop→ストップ、bed→ベット、stock→ストック、egg→エッグ、goods→グッズなどのように、促音の強勢的機能によって、原語の破裂音の前ではほとんどの場合、原語音にない促音が挿入され、その強制を表すのである。

要するに、音韻の脱落と添加は、いずれも原語の強弱アクセントとの違和感を和らげるための工夫である。

#### おわり

日本語語彙の中で外来語のパーセンテージはおよそ 10%と、決して少なくない。そして、それも日一日と増加する一方である。多くの新語は使用領域が狭く、一般性に乏しい。新語辞典など特殊辞典を除けば、普通の国語辞典には、載っていないものが多くあって、日本語学習者にとって人泣かせである。しかし、英語音韻と仮名との対応関係を知っておけば、原語音形の推測が可能になり、英語を通じてその意味を調べることができる。

日本の文字社会では、外国語を原文のローマ字で綴り、広告文やキャッチフレーズ、新聞雑誌の見出しなどに、そのまま使うことがよくある。そのため、中国の日本語学習者にとっては、原語音を日本語音に読む必要が生じ、両者の対応法則について把握しなければならない。

#### 参考文献

- 1、 榎垣実『日本外来語の研究』 東京研究社 1963 年
- 2、 荒川惣兵衛『外来語学序説』 東京研究社 1932 年
- 3、 小泉保「音声と音韻」 『講座日本語と日本語教育』2 巻 明治書院 平成元年
- 4、 城生佰太郎「音声記号」 『講座日本語と日本語教育』2 巻 明治書院 平成元年
- 5、 前川喜久雄「母音の無声化」 『講座日本語と日本語教育』3 巻 明治書院 平成元年
- 6、 杉藤美代子「音節化か拍か」 『講座日本語と日本語教育』3 巻 明治書院 平成元年
- 7、 郡史郎「強調とイントネーション」 『講座日本語と日本語教育』3 巻 明治書院 平成元年
- 8、 中岡典子「撥音と促音」 『講座日本語と日本語教育』3 巻 明治書院 平成元年
- 9、 石野博史「外来語」 『講座日本語と日本語教育』6 巻 明治書院 平成元年
- 10、 兼子尚道「英語における語アクセントとリズムの研究」 『音声研究』11 1994 年
- 11、 喻雲根『英漢対比語言学』 北京工業大学出版社 1994 年
- 12、 趙基天『日語語音簡論』 吉林教育出版社 1994 年
- 13、 陳宝庫『日語外来語還元規則指南』 中国環境科学出版社 1993 年

(平成19年 3 月22日受理)